

教えてはちくん!木づかい通信 Vol.10



大館市観光キャラクター

「はちくん」

※チェンソーマンVer.

テーマ

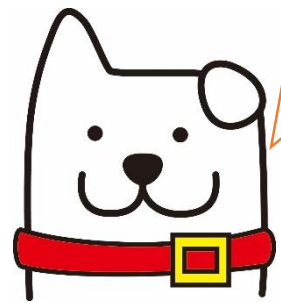
昭和の末期に外圧が
やってきたおかげで

～木造排除の方針に穴が・・・～

令和4年1月
産業部林政課

テーマ「昭和の末期に外圧がやってきたおかげで」

教えてはちくん!



昭和後半、日米貿易摩擦の外交問題の解消のため、交渉の中で人工衛星やスパコンと並んでやり玉に挙がったのが、**木材・木質建材**でした。この外圧を受けて、昭和末期の1987(昭和62)年に出された施策が、**建築基準法の大改正(大規模木造の部分的解禁)**でした。**木造排除の大方針に穴が空いたのです**。日本の木材業界は、造作用・化粧用の木材だけでは木材需要に限界を感じていましたので、この施策によって、構造用の用途が拡大することに期待をかけました。

「目からウロコの木のはなし、P136～138」



なぜ建築基準法改正?

もう少し詳しく

～“木造建築の暗黒時代”下での林業・木材業～

日米貿易摩擦に関する交渉の中で、

・大型木造が珍しくない北米から見れば、当時の日本の建築界全体に流れる木造排除・軽視の風潮、例えば「**高さ13m、軒高9m以上の建物は木造禁止**」という建築基準法の規定は、非関税障壁以外の何物でもなかった。



建築基準法改正によって約30年間続いた、“木造建築の暗黒時代”がようやく明けることに



・様々な構造用木質建材の規格や基準が整備され、それらを利用した新しい木造建築も次々と建設されるようになった。

⇒木材輸入自由化の中でも国内林業が好景気であったというのは意外だったのではないのでしょうか。仮に高度成長期の爆発的な木材需要を国産材だけで対応していたら、今頃国内の森林はどうなっていたかは分かりません。建築基準法改正で木材利用拡大に拍車がかかると思った矢先、業界の情勢を大きく変えることになる大事件が発生しました。続きは次回で。

<林業・木材産業界>

・高度経済成長ということもあり、構造用の用途は制限されていたものの、木材需要はどんどん増加し、国産材だけでは対応できないことから、1964(昭和39)年に木材輸入の自由化がはじまる。
・国産材資源は不足したままであったため、基調として好景気が続いた。秋田県は古くからの林業地で、豊富で優良な木質資源を有していたため、日本でも有数の林業県でいられた。

<木造建築業界>

・木造プレハブの登場以外にこれといった技術革新はなかったが、新設住宅戸数の増加により全体的に右肩上がりの状況が続いた。

⇒高度経済成長に伴って木材需要が増加している間、木材関連業界は好況だったが、需要は1973(昭和48)年にピークをうち、その後オイルショックを経て縮小し、停滞状態へ陥る。